Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

創設34回目にして初めてカリフォルニア州のデルマー競馬場が舞台となった、北米競馬の祭典ブリーダーズC（11月3日・4日）。馬ならば、メイン競走のBCクラシック（d10F）を2・1/4馬身差で制し、今季の全米年度代表馬の座を確実にしたガンランナー（牡4）。人ならば、BCジュヴェナイルターフ（芝8F）を管理馬メンデルスゾーン（牡2）で制し、更新中の調教師年間G1最多勝記録を27に伸ばしたエイダン・オブライエンや、BCジュヴェナイルフィリーズ（Gd8．5F）をカレドニアロード（牝2）に騎乗して優勝し、BC通算26勝目を手にして自らが持つBC騎手最多勝記録を更新したマイク・スミスらに脚光が当たったが、最も顕著な活躍を見せたプレイヤーを挙げるとすれば、調教師のピーター・ミラー（51歳）であろう。

2日目の第5競走に組まれたG1BCターフスプリント（芝5F）を、管理馬ストーミーリベラル（セ5）で制し、ブリーダーズC初勝利を挙げるとともに、2着にも管理するリチャーズボーイ（セ5）が入り、1・2着独占を達成。更に、第8競走に組まれていたG1BCスプリント（d6F）でも、送り出した管理馬ロイエイチ（セ5）が勝利を収め、1日で2度のBC制覇を手にしたのである。ミラー師はBCスプリントに管理馬カルキュレイター（牡5）も出走させており、こちらは7着だったが、ブリーダーズCに4頭を出走させて3頭が連対を果たしたのだから、これ以上は望むべくもない成績と言えよう。

ミラー師はロスアンゼルスの出身で、現在はデルマー競馬場から車で10分というエンチニタスという街に住んでいる。調教師としての最高の1日を地元で迎えることが出来たというのは、彼にとって二重の喜びであった。

両親が馬主であったため、幼少の頃から競馬に親しんだのがミラー師で、8歳の頃から毎年欠かさず足を運んでいたのが、デルマー競馬場だった。更に、妻のラニさんとの出会いの場もデルマーだったというから、ミラー師にとっては故郷のロサンゼルスよりも遥かに、思い入れの強い地であった。

最初は騎手になりたいと思ったものの、体が大きくなり断念。調教師を目指して経験を積むにあたり、まず門をたたいたのは、“ボールドイーグル”の異名をとった伝説の伯楽チャーリー・ウィッティンガム調教師が営む厩舎であった。サンタアニタH勝ち馬グレイントンや、芝戦線で活躍したパレスミュージックらがいた時代である。

その後、マイク・ミッチェル、ドン・ウォーレンといった調教師にも師事した後、カリフォルニアを代表する馬主ジョン・メイビー氏のレーシングマネージャー職を経験した彼が、ついに独立してピーター・ミラー厩舎を立ち上げたのは、1987年のことだった。

だが、6シーズンを戦って全く目が出ず、1992年をもって調教師業から一旦は撤退。捲土重来を期して1995年に再びミラー厩舎の看板を掲げるも、またしても結果が出ず、1997年をもって2度目の撤退に追い込まれている。

2度失敗し、それでもなお諦めなかったところが、この男の凄いところだ。ミラー師が3度目の開業に漕ぎつけたのが2004年で、3シーズン目の2006年に30勝を挙げ、年間収得賞金が120万ドルに達して、ようやく厩舎経営が立ち行くようになった。そして翌2007年、OBSマーチ2歳セールにて10万5千ドルで発掘したセットプレイでG1デルマーデビュータントを制し、初のビッグタイトルを獲得。そして2012年に、デルマーの夏開催でリーディングの座に就き、第一線に君臨することになった。

2頭のBC勝ち馬のうちストーミーリベラルは次走、12月10日のG1香港スプリント参戦を視野に入れている。臥薪嘗胆を経験した末に這い上がって来た男ピーター・ミラーが、香港で、日本馬の前に立ちはだかる可能性もありそうである。